

五 自己に氣付かぬ人々

いつも好んで高い庭樹の上に座禪する道林和尚。鳥窠禪師と云はれて居た位、毎日鳥の巢の様に樹の上に御座つた。處へ當縣の知事に新任した白樂天、詩文の大家であるのが、和尚に面會とやつてござつた。「和尚何處に」と案内を乞へば、樹の上につくねんとして眠りかけてござる。下から「和尚危い」と聲をかける。上から「貴公こそ却つて危いぞ」ときた。樹の上によつて眠りかけて居る人よりも、地の上に立つて居る人が餘程危いとは、一寸受取れぬ話。屋根屋と疊屋と同じ家に仕事して居る。屋根屋は上に、疊屋は下に互に精出して居る。下から疊屋が聲張上げて、「同じ仕事をするのなら、そんな高い處で危い藝當するより、下で安氣に仕事したがよからう」と云へば、屋根屋も負けては居らぬ。「何ツ馬鹿な。昔から屋根の上で死んだ者はないが、疊の上では幾程死んだか解らぬぞ」とやつたさうな。そんなものだ。高い處よりも低い處の方が、却て危い。實際一番に恐しい處は寢床である。大方人は寢床で死ぬる。人の多く死ぬ處は寢床であるにも拘らず、狎れては平氣で、寢たほど樂なものはないと云ふ。

こんな調子でやりこめられた白樂天。「佛教の奥義如何」と問へば、「諸惡莫作衆善奉行」と答へらるゝ。「其位のこととは三歳の孩兒も知つて居る」と、聊か冷笑の風あると共に、禪師言下に聲勵まして、「三歳の孩兒之を道ふは易し」と雖も、八十の翁も之を行ふは難し。聞いて白樂天總身に汗を催し、是は今迄我身知らずであつたと、直に佛教に歸入せられた。